

結核性脊椎炎ノ統計ト其ノ療法

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30731

結核性脊椎炎ノ統計ト其ノ療法

郡立江沼病院外科部(部長七五三龜吉)

池田 外喜 男

一、緒 言

結核性脊椎炎ハ古來種々ノ名稱ヲ有シ Pott'scher Bruchel, Ostitis tuberculosa, Osteomyelitis, 等其他各國諸家ニヨリテ異ナルモノアリ。而シテ我國ニ於テハ結核性脊椎炎 Spodnyitis tuberculosa、脊椎結核 Wirbel-tuberculose、脊椎炎 Wirbelentzündung、脊椎骨瘍 Caries d. Wirbelkörper 等普通慣用セララルル名稱ナリ、其ノポット氏龜背或ハポット氏病若クハポット氏角ト稱スル所以ノモノハ千七百七十九年ヨリ千七百八十二年頃ニ於テ英國ノ外科醫 Perival Pottガ本病ニ就キ詳細ナル報告ヲナセシニヨルモノナリ、然レドモ本症ノ記載ハ已ニ太古 Hippokratēs 時代ニ於テ見ル所ノモノニシテ幼年慢性肺疾患ト同時ニ來リ龜背胸廓ノ變形等ヲ起シ軟部殊ニ鼠蹊等ニ化膿ヲ惹起スルモノトナシ其ノ龜背ヲ形成スル原因ハ中古ニ至ルマデ脊椎ノ脱臼ト見做サレ而シテ其ノ整復ニハ單ニ暴力ヲ以テナサントセルモノアリ、今ニシテ思ヘバ實ニ危險千萬ナリシモノナリ、我國ニ於テハ最近マデ尙ホ接骨醫等ガ誤診ノ結果、暴力整復ヲ試ミ反テ増悪セシメシ例往々ニシテ發見セララルル所ノモノナリ。然ルニ十九世紀ノ初メニ至リ佛醫 Delpech、次テネラトン Naton ニヨリ本病ハ結核性脊椎炎ニシテ其ノ結果椎間軟骨ノ壓迫消失ニヨリ龜背ヲ形成スルモノナリト唱ヘラレ、Pott 後ニ至リ判明セルモノナリ。其後幾多ノ學者ニヨリテ研究報告セラレ解剖的變化診斷等益々明瞭トナレリ、其ノ療法モ漸次進歩セシモノ多々アルモ或ハ成功シ或ハ失敗ニ歸スルモノアリテ萬全確實ナルモノナキヲ遺

憾トス。本郡即チ石川縣江沼郡地方ニ於テハ俗間單ニ脊椎ト稱シ全然不治ノ疾病トナシ肺結核症ト共ニ地方人ノ恐怖スル所ノモノナリ、如何ニ其ノ難症ニシテ且ツ豫後ノ不良ナルカヲ知ルニ足ルベシ。我國ニ於テハ蘭醫時代一千八百七十九年ノ頃ハ未ダ寒性腫瘍ト稱シ腺病性ナリトシ專ラ下垂膿瘍ニノミ療法ヲ試ミテ脊椎彎曲ニ重キヲ置カザリシモノノ如シ。

二、統 計

最近九大整形外科教室ニ於ケル過去八年間ノ本症治驗例八千六百五十三例ヲ示シ此ノ驚ク可キ頻數ハ確カニ從來本症ガ其ノ臨牀上如何ニ屢々其ノ診斷ヲ誤ラレ爲メニ看過サレ居リシモノナルカヲ證スルニ足ルト云ヘリ。然レドモ其ハ診斷上醫師ノ怠慢ニ歸スルモノアランモ亦稀有ナル疾病ニアラズトシ其ノ報告セザルニモヨルモノナランカ。明治四十三年發行ノ三輪外科叢書第五編ヲ見ルニ三輪博士ハ其ノ最近十年間ニ於テ入院患者五千七百七十四名及ビ外來患者三萬九千〇八十九名ニ就キ調査セシ結果前者ハ七十二名(一・三九%)後者ハ六百六十五名(〇・四二二%)ノ本病患者ヲ發見セリト云フ。尙ホ外國文獻ニヨル報告者、患者數及ビ其ノ%ニ就テハ次ノ表記アリ。(三輪外科叢書)

報告者	外科患者總數	本病患者數	%
Brethner	七八二九七	二八〇	〇・三五八
Billroth	四一〇〇	六一	一・五〇
Hofka	六七九一九	一四二	〇・二一
Lorenz	三二四二四	二五一	〇・七五
Mohr	四五二〇	七六	一・六八
Wullstein	一〇〇〇〇	三六五	〇・三六五
計	二八七二六〇	一一七五	〇・四〇九

名ニ就キ結核性脊椎炎患者六十三名即チ〇・六六%強ナルヲ發見セリ。年齡ト本病トノ關係ニ就テハ泰西ト我國トハ大

(22)

イニ異ナルモノアリ、即チ Drachmann, Mohr, Vulpis, Wullstein, Billroth, Little, Lorenz, Beutner, 諸氏ノ報告ニ
 ヨルモ十歳以下、殊ニ五歳以下ノ幼兒ニ最モ多ク Nabel ハ二百二十八名ノ本病患者ニ就テ調査シ十五歳以上ノ小兒ニ
 シテ本症ニ罹リシ者僅々二十八名ナリシト云フ。Eilmann ハ結核性脊椎炎ハ三歳乃至十歳ノ小兒ニ最モ多ク十五歳以
 上ニハ罕レナリト云ヘリ。Drachmann ハ一歳乃至十歳ノ一二四七七・〇%ニ對シ二十乃至三十歳ハ僅カニ七四・三%ヲ
 算シ Mohr ハ甲三七五・一・〇%ニ對シ乙五七・〇%。Vulpis ハ甲六九七・二・〇%ニ對シ乙七七・〇%。Wullstein ハ甲二二
 七六・二%ニ對シ乙三五九・六%ヲ算出セリ。然ルニ三輪博士ノ千葉病院ノ調査ニヨレバ入院患者七十二名中一歳乃
 至十歳ノモノ八三・三%。十一乃至二十歳ノモノ二〇・八三%。二十一乃至三十歳ノモノ三六・二%。三十一乃至四十
 歳ノモノ二七七・七%。四十歳以上六九・四%ニシテ外來患者百六十五名ニ就テハ一五・一五%。二二・三六%。二二・五
 %。二〇・〇%。一〇・九%ナリ。郡立江沼病院ニ於テハ次表ノ如キ結果ヲ得タリ。

年 齡	人 數	%
一—一〇	九	一四・二
一一—二〇	二〇	三一・七
二一—三〇	一五	二二・八
三一—四〇	一	一七・五
四一—五〇	六	九・五
五〇以上	二	三・一

是ニ由リテ之レヲ觀ルニ泰西諸家ノ報告ニ比シ三輪博士ノ報告モ余等
 ノ調査モ亦大イニ其ノ趣キヲ異ニシ、十歳以下ノモノハ反テ小數ヲ示
 シ、千葉ニ於テハ二十一歳ヨリ三十歳ノ間ニ最モ多ク、江沼ニ於テハ十
 一歳ヨリ二十歳ノモノニ最モ多クシテ二十一歳ヨリ三十歳ノモノ之レニ
 次グ。三輪博士ノ說ニヨレバ泰西ノ初生兒生活狀態ト本邦ノ初生兒生活
 狀態トヲ比較スルニ前者ハ人工榮養法盛ニ行ハルルモ後者ハ殆ド天然榮

養法ニヨリテノミ發育ス爲メニ本邦兒ノ榮養狀態ハ泰西兒ノ榮養狀態ニ比シテ概シテ佳良ナリ此レ泰西兒ニ本病ノ多
 キ所以ナランカ、之レニ反シ生育後ノ生活狀態ハ泰西人ノ滋養食ニ比シ本邦人ノ遙カニ低度ナルノ感アリ殊ニ中年時
 代ニ於テ本病患者ノ多キ所以ナリト云フ。兎ニ角泰西人ト本邦人トノ本病ニ對スル年齡關係ノ著シク異ナルハ三輪博
 士ノ統計ト余等ノ統計ト一致スルヲ以テ明カナリト謂フヲ得ベシ。或ハ本邦ニ於テモ地方ニヨリテ多少ノ差アルヤモ

計リ知ル能ハザルナリ。

性ノ關係ニ於テハ其ノ大差ナク泰西ニ於テハ Reutner, Billroth, Bradford, Dollinger, Draehmann, Fischer, Gilney, Raffé, Little, Lorenz, Menzel, Mohr, Nebel, Taylor, Valpins, Wulfskein ノ諸家ノ報告統計六千九百五十一名中男三千七百四名(五三・二九%)。女三千二百四十七名(四六・七一%)ニシテ女子ニ比シテ男子僅カニ優勢ナリ三輪博士ハ次表

例	數	男	女
入院患者	七二	四四(六〇・二八%)	二八(三九・七二%)
外來患者	一六五	一〇二(六一・八一%)	六三(三八・一九%)
Nebelニ依ル數	一三六	八三(六一・〇〇%)	五三(三九・〇〇%)

ノ總統計ニ比シ殆ンド大差ナキモノナリ。

例數	男	女
六三	三七(五八・七%)	二六(四一・二%)

テハ男子優勢ナリ是恐ラク春機發動期及ビ産褥授乳期等ノ關係ニ基因スルモノナラント云フ。

年 齡	患者數	男	女
一—一〇	九	六(六六・六%)	三(三三・三%)
一一—二〇	二〇	一五(七五・〇%)	五(二五・〇%)
二一—三〇	一五	九(六〇・〇%)	六(四〇・〇%)
三一—四〇	一一	二(一八・一%)	九(八一・八%)
四一—五〇	六	三(五〇・〇%)	三(五〇・〇%)
五一以上	二	二(一〇〇・〇%)	ナシ

ニ於ケル數ヲ示シ Nebelノ統計ト略一致ス然シ
余ノ「クリニツク」ニ來ル患者ハ女子ヨリモ男子
ノ多キニヨルナラント云ヘリ。
郡立江沼病院ニ於テハ次表ノ如クニシテ泰西

各年齡ニ於ケル男女兩性ノ關係ニ就テハ Wulfskeinノ

調査ニヨレバ十一歳乃至十五歳ノ時ト二十一歳乃至三十歳
ノ時トニ於テ女子ハ男子ニ比シテ優勢ナルモ他ノ年齡ニ於

Lorettノ「ポストン小兒病院ニ於ケル二十五年間ノ報告

ニ於テハ一般ニ男子ハ女子ニ優レリ。我病院ニ於テハ泰西
諸家ノ報告ト大イニ其ノ趣キヲ異ニシ次ノ表ノ如シ。

即チ三十一歳乃至四十歳ニ於テ男子ヨリモ女子優勢ナル
ノミニシテ他ハ皆男子優勢ナリ。斯クテ二十歳ヨリ四十歳
ニ進ムニ從ツテ女子ノ數ノ漸次男子數ニ接近シツツアルカ

ノ感アリ、是或ハ産褥、授乳等身體抵抗力ノ減少ニ基因スルト云フ說ニ一致スルモノナランモ春機發動期ハ性ニ於ケル關係ヲ發見スルコト能ハズ遺傳的關係、部位等ニ就テハ此處ニ明記シ得ザルヲ遺憾トス。

三、療法

本病ノ療法ハ一般結核病ノ療法ト骨結核療法ヲ行フ可キモノニシテ古來二様ノ目的ニ出デズ。一ハ全身療法即チ要ハ衛生的榮養療法特ニ日光、新鮮ナル空氣ノ利用ト共ニ健胃強壯劑及ビ食物ニ留意シ一般狀態ノ改善ニ努メ或ハ海水浴溫泉療法等ヲ試ミ以テ爾他身體各部ノ續發症及ビ其疾病ノ輕快ヲ豫期シ、一ハ局所療法トシテ一方器械的ニ脊柱ノ外形變化ヲ矯正スルト同時ニ絶對安靜ヲ與ヘ以テ其ノ壓迫症狀特ニ神經痛及ビ刺戟症狀即チ壓迫脊髓炎ヲ輕快セン事ヲ圖リ或ハ溫浴、塗擦療法ヲ兼ネ、間接ニ局所ニ作用セシメント欲スルモノアリ。又膿瘍アルモノハ之ガ排膿ヲナシ沃度ホルムグリセリン」等ノ注入ヲ試ミ其ノ卓效ヲ希望ス。特ニ器械的療法トシテハ古來幾多ノ研究ヲ重ネ其ノ方法等種々アリ。全身療法ニ就テハ吾人此處ニ論ゼズ外科醫ノ目的タル局所療法特ニ器械的療法ニ就テ更ニ云フ所アラントス。器械的療法ニ於テモ亦二ツノ目的ヲ有ス、一ハ患者ノ疼痛、麻痺等ヲ緩解セシメ、一ハ脊柱ノ變形ヲ輕減セシムルニアリ。其ノ方法タルヤ骨、關節結核療法ノ原則ト一般、甲ハ安靜不動ヲ命ズルト共ニ乙ハ龜背ノ矯正ヲ計リ脊髓ノ壓迫ヲ輕減セシム。

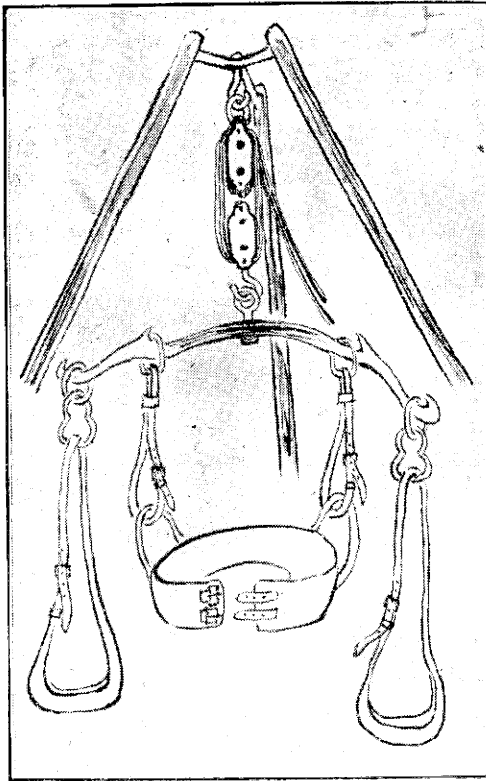
以上ノ目的ニ向ツテ患者ニソヲ嚴守セシムルト共ニ可及的完全ニ施スベク其方法等古來種々様々ニ考究施行セラ。其ノ疾病ノ經過時期及ビ患部ニヨリテ異ナルベキハ勿論ナルベキモ吾人ハ其ノ重要ナルモノヲ列舉スルニ止メ更ニ實驗ニ就テ述ベントス。

臥床療法。 臥床療法ハ專ラ開花期ノ療法トシテ水平仰臥位ヲトラシムル事ニヨリテ前述ノ目的ヲ達セントスルニアリ。Bainfieldノ如キハ反テ腹位ヲ常用セリト雖モ持久シ難キ體位ナリ。仰臥位ハ元、單ニ硬キ藁布團ノ上ニ仰臥

セシムルヲ以テ足ル可キモ種々ノ缺點アリ。又病竈ノ部位ニヨリ頸椎ニハ展伸法ヲ選ビ。胸椎、腰椎ニ對シテハ Reklination ヲ稱揚セルガ如ク。要ハ椎間軟骨ヲ延長セシメ各椎骨髓ヲ離間シ以テ患椎部ノ減壓 *Entlastung* ヲ希望スルモノナリ。從ツテ横臥裝置 *Lagerungs vorrichtung* トシテ諸家ノ工夫、裝置等種々案出セラレタルモノ多シ。 *von Volkmann* ハ *Jurymast* ニ *Glisson* 蹄系ヲ附シ寢臺ニ裝置セル滑車ニ連結シ重錘ヲ作用セシメ反對牽引ハ斜面ニ於テ患者ノ體重ヲ應用セリ。 *Pholp* ハ前者ノ考案ヲ立牀トナシ運搬ニ便ナルベク寢臺裝置ヲ作成シ *Bradford* ハ其ヲ改良シテ患者ヲ寢臺縁ニ結縛セリ、尙ホ *Pholp* ノ立牀ハ *Bonnett*、*Sayre* 等ニヨリテ多少改良セラル。 *Rachlitz* ハ浮遊器 *Schwelbe* ヲ考案使用セリ。浮遊器ハ今モ尙ホ使用スルニ便ナル事アリ然レドモ現今廣ク費用セラレツツアルモノハ十九世紀ノ末ニ至リ *Lorenz* ノ創案セル *Reklinationsbett* 即チ *Grysbett nach Lorenz* ニシテ爾來種々改良ヲ加ヘラレタルモノナリ。殊ニ此ノ牀ハ胸椎中央以下腰椎ノ固定ニ適スルノミナラズ「ユリマスト」ノ兼用ニヨリテ頸椎ノ固定ニ應用セラル。其ノ製法ハ患者ヲ腹位ニ臥セシメ其ノ前額部、鎖骨部、鼠蹊部、足關節部ニ大小ノ圓枕ヲ置キ以テ脊椎變形ノ度ヲ減ジ斯クテ後頭部ヨリ薦骨部ニ至ルマデ大ナル布帛ヲ以テ覆ヒ其ノ上ニ幅廣キ義布斯縛帶ヲ一乃至二仙迷ノ厚サニ纏敷ス、或ハ縱徑ニ薄キ木板若クハ木栓板ヲ卷キ込ミ義布斯重量ヲ減セント試ムルモノアリ、硬化ヲ待チテ患者ヨリ除去シ適當ノ切除ヲ加ヘ全ク乾固スルヲ待チテ患者ヲ此ノ牀内ニ仰臥セシム。然レドモ亦ローレンツ氏牀ハ *Reklination* ヲ強クセント欲スルトキハ常ニ牀ノ改造ヲ要ス。 *Willstein* ハ木牀ヲ造リ牀ヲ除クモ患者鐵枱上ニ止マル様ニナシ其ノママ入浴セシメ彈力帶ノ調節ニヨリ隨意ニ *Reklination* ヲ營ミ又運搬ニ便セリ。又同氏ハ龜背部ニ螺旋撥條ヲ連結セシメ大小ノ枕ヲ貼シテ隨意ノ *Reklination* ヲ營メリ。

癒合期ノ療法トシテハ、疾患部位ノ如何ヲ問ハズ後頭、骨盤間ニ於テ脊椎ヲ平等ニ展伸シ完全ナル固定ヲ施スニアリ。其方法トシテハ幾多ノ裝置アルモ其ノ二三ヲ舉グレバ *Waller* ハ浮遊横臥裝置ヲ造リ任意ニ伸縮シ得ル鐵枱ニ縱横ノ紐條ヲ有スル帶ヲ以テシ尙ホ頭部固定器、腰部固定裝置ヲ附屬シ反對展伸ヲ以テス。 *Schulte* ハ除去シ得ル數個ノ枕

ヨリナル一種ノ机ニシテ枕ヲ除ケル部分ハ浮遊セル形トナリ軀幹ノ重力ヲ應用シ展伸ノ弛緩シ又ハ増伸スルニヨリテ Reklination ヲ高度シ又ハ減少セシメ得ルモノナリ。 Lorenz, Alivistos ハ頸位ニ於テ螺旋ニヨリテ加減シ得ル壓枕ヲ作用セシメ足及ビ頭部ノ固定ヲナシ之レニ螺旋ヲ附屬シテ自由ニ伸展ヲ加減シ以テ Reklination ヲ行ヒタリ。 Bracket, Willestein ハ前同様ノ方法ヲ水平仰臥位ニ於テ試ミタリ。 Grunzole ハ義布斯机ト螺旋ヲ有スル四角形ノ鐵枠トニヨリテ頭部下肢ヲ牽引シツツ義布斯帶ヲ施セリ。 Tysdall, Taylor ハ鉛直位ニ於テ矯正ヲ試ミタリ。吾人ハ複雑ナル器械ノ而モ不廉ナルモノハ到底小病院ノ許サザルヲ以テ Colot ノ義布斯コルセット」製法ニヨリテ満足シツツアリ、吾人ハ三脚器ノ中央ニ連用滑車ニヨル懸吊器ヲ掛ケ自由ニ高低ヲ調節シ得ル様ニシ、頭部蹄系ハ獸皮製ニシテ内面ニ鞣皮ヲ貼り、紐條ヲ以テ頭部ノ大小ニ應ジ調節シ得。尙ホ兩上肢ヲ支持スル爲メ同様獸皮ノ懸吊器ヲ附屬セシム略圖ニ示セルモノ之レナリ。



尤モ頭部迄モ義布斯帶ヲ施スノ要アル場合ハ蹄系紐ヲ用フルコトアリ。

「コルセット」ヲ使用セシムルハ上述ノ如キ方法ニヨリ安臥セシムルコト大約一ヶ月ノ後癒合期ヲ待チテ行ハルベキ洵ニ推賞スベキ理想的療法トモ云フ可キモノニシテ永キ歴史ヲ有シ其價值亦大ナルモノタルヲ信ズ、飯島清氏ノ板紙「コルセット」及ビ其價值ニ就テ附「コルセット」小史（日本外科學會雜誌十一、二十一）ハ其ノ沿革ヲ闡明ニシ且ツ其ノ價值ハ本

病ノ療法トシテ唯一ノ良器タルヲ教ユ吾人モ亦同感「コルセット」ノ研究ヲ試ミントス。

「コルセット」 Korsett ハ胸衣、甲衣、脊柱支持甲等ト稱セラレ、一千五百六十一年初メテ佛國ノアンブローズ、バレー氏 Ambroise Paré ガ脊柱畸形矯正ニ向ツテ孔ヲ穿テル鐵板コルセットヲ案出セシヨリ急速ノ發達ヲ遂ゲ甲冑様ノ裝置トナリ、千六百〇八年ヨリ千六百十二年頃ハ「アルミニウム」ヲ應用スルニ至レリ。其後十八世紀前後ニ至リテハ婦人用コルセットヨリ案出セラレタル麻苧ニ副子魚骨等ヲ縫込マレタル材料トナリ。千七百六十年マクニ氏 Magny ニヨリ改良セラレ鐵或ハ銅線ヲ以テシ特別ノ絞扼裝置ヲ設ケラレ當時ハ其製作、應用ニ没頭セリ。義布斯コルセットハ千八百七十四年米人セーヤ氏 Seeya ガ義布斯縲帶ヲ試ミシニ初マリ千八百七十六年同氏ハ竟ニ義布斯コルセットヲ創案セシモノニシテ義布斯ヤックセット即チ是ナリ。千八百七十六年カッペレル氏 Kappeler ハフテル氏 Hafter 及ビフルトンン氏 Falkson ハ水硝子コルセットヲ製出シ。サテハ水硝子鑲線コルセット (Karewski, 1868)。毛氈コルセット (W. Adams, P. Bruns, 1879)。木屑コルセット (Waluch, 1882)。「コルクコルセット」 (W. Mintz, 1898)。紙コルセット (Hawkes, 1892)。「セルローゼコルセット」 (Hübshner, 1897 Vulpinus 1899 Lorentz 1895)。「セルロイド」アセトン綿紗コルセット (Lauderem, Kinsch. 1895)。革皮コルセット (Loth 1895, Pingler, Vulpinus 1900)。以上「コルセット」ノ沿革ハ金屬コルセットニ初マリ革皮コルセットニ終レリ。而シテ最近我國ニ於テハ飯島氏、板紙コルセットノ製法ヲ傳ヘ、理想的コルセットトシテ推獎セラレタリ。吾人ハ其ノ材料廉價ニシテ且ツ容易ニ製作シ得ルヲ喜ブモノナリ。

膿瘍ノ療法。防腐及ビ制腐法ノ不完全ナル往時ニ在リテハ本病ニ於ケル膿瘍ハ危險症狀ヲ恐レテ全ク廢棄セラレ殆ンド手ヲ觸ル可カラザルモノトセリ (Strohmeyer 時代)。我國蘭醫時代ハ流注性腫瘍ハ之レヲ開破スルモ惡徵ヲ發スル事多シ自潰セントスルニ至ラザレバ開破スルヲ禁ズ若シ已ムヲ得ズシテ開破セント欲セバ刀ヲ以テ截開セズ唯套管針ヲ刺シ排膿ハ緊張ノ減ズルヲ以テ足レリトスト云ヒシモノニシテ外氣ノ竄入ヲ恐レテ何等藥物ノ注入ヲ試ミザリシ

モノナリ。唯ダ塞性膿瘍ノ瘻孔ニ對シテハ稀沃陣丁幾、稀硝酸、石炭酸水若クハ硝酸銀水ノ注入ヲ試ミシモノナリ。「ヨードフォルムグリセリン」ノ骨、關節結核化膿ニ對シ卓效アルヲ唱道セラルルニ至リシハ Billroth Mikulieノ兩氏ニ初マリシモノニシテ現今モ尙ホ專ラ應用セラルル所ノモノナリ。瘻孔ニ對シテハ沃度ホルムグリセリン」ノ外、沃度丁幾、沃度フォルム桿送入等アリ。或ハ「ナフトールカンフル」沃度フォルムエーテル」沃度フォルムオレーフ油等各國各人ニヨリテ種々應用セラル。吾人ハ五十プロセント」白糖グリセリン」ノ注入ヲ試ミ瘻孔ニ對シテハ純白糠若クハ「ベルボーラツキス」ノ充填ヲ試ミ良結果ヲ得タリ。

手術的療法。脊椎弓ノ切除術 Die Resektion d. Wirbelbogen 所謂脊椎圓鋸術 sog. Preparation d. Wirbelsäule ハ既ニ十九世紀ニ於テ脊椎及ビ脊髓各種ノ疾患及ビ損傷ニ適用セラレ脊髓外科學トシテ其ノ良効アルヲ唱フ。千九百十一年米醫 Allee ハ罹患脊椎ト其上下ノ脊椎棘狀突起ヲ其基底ニ達スルマデ切割シ軟部ノママ一側ニ挫倒シ其ノ溝間ニ他ノ骨片ヲ移植シ龜背ヲ矯正シ斯クテ髓ヲ以テ骨片ヲ固定シ筋膜ヲ以テ骨片全部ヲ被保セルモノニシテ術後「ギフス床ヲ作り安臥セシムルノ法ナリ。鈴木寛之助博士ハ二十一例ニ就テ實驗シ結核雜誌ニ報告セラレ最モ理想的ノモノトシテ推奨セラレタリ。最近住田正雄博士ハ之レニ反シ細小ナル骨片ヲ移植シテ其ノ目的ヲ達セントスルガ如キハ萬不可能ノ事ニ屬ス即チアルビー氏手術ハ脊椎カリエス」ノ療法トシテ不合理ナルノミナラズ全然無意味ノ手術ト見ルノ外ナカルベシ、矯正後患者ニ與フル「コルセット」ハ現今「セルロイドアセトン」製ノモノ以外理想ニ近キモノヲ推奨スル事能ハズト云ヘリ、之レニ對シ鈴木博士ハ本年五月廿一日ヨリ醫界時報上ニ「余ガ脊椎カリエス」ニアルビー氏法ヲ行ヒタル理由ノ説明」ト題シテ連載セラレ住田博士ノ六事項ニツキ明細ナル説明ヲセラル吾人ハ今ヤアルビー氏法ハ既ニ Klinische Anwendungノ時期ニ入レルモノタルヲ知ル。

四、實 驗 例

實驗例ノ全部ヲ詳述スルハ徒ラニ繁雜ニ流レ易キノミナラズ其ノ經過ノ不明ナルモノ等アルヲ以テ其ノ重要ナリト認ムルモノノミニ就テ述ベントス。

第一例

初診 大正四年四月十五日。

山○瀧 男、二十歳、漆器商家族學生。

遺傳的關係 父母健存、同胞十人中四人ハ死亡シシ他健存ス其他特記ス可キモノナシ。

既往症 已往症生來強健ナラザリシモ著患ナシ、十七歳ノ時右肋膜炎ニ罹リ爾來身體稍々薄弱トナリ、大正二年四月更ニ左肋膜炎ニ罹リ數ヶ月ニシテ治シ其後ハ本病發生マテ疾患ナシ。

本病歴 大正三年二月突然腹部ニ激痛ヲ起シ腹膜炎ノ診斷ノ下ニ醫治ヲ受ケ八月ニ至リテ治セリ然ルニ其ノ後日ナラズシテ腰痛起リ四肢振盪シ麻痺狀ヲ呈シ歩行困難ヲ來セリ、爾來日々増症シ二三日ニシテ終ニ全ク歩行シ得ザルニ至レリ、依ツテ某病院ニ入院八十日ヲ經過セシモ全治ノ見込立タズ、退院後溫泉療法ヲ試シタリ、然シ尙ホ良好ナラズ來院セリ。

現在症 體格榮養共ニ不良、身長比較的大ナリ全身ノ皮膚蒼白色ヲ呈シ體溫三十七度二分、脈搏百至、胸部打診音左右稍々短調ナル外著變ヲ認メズ、聽診上殆ド異狀ヲ認メ得ズ、心臓、腹部等又異常ナシ、四肢ノ腱反射著シク亢進シ移動ノ際振盪ス、背部ヲ檢スルニ第九背椎骨棘狀突起突出シ其部ノ皮膚赤褐色ニシテ壓痛アリ、腰部彎曲二三寸生ゼリ。右腰部ニ於テ約手拳大ノ波動著明ナル半球狀腫物ヲ見ル壓痛ナシ。

診斷 第九背椎カリエス下垂膿瘍、神經衰弱症。

治療及經過 即日入院ヲ命ジ翌日下垂膿瘍ニ對シテ穿刺排膿シ沃度ホルムグリセリンヲ注入ス、仰臥浮遊裝置ニヨラシメ安靜ヲ守ラシム。

原著 池田 結核性脊椎炎ノ統計ト其ノ療法

内服藥トシテハ一般結核病ニ對スルト同様、強壯藥、食慾促進藥ヲ處方セリ。鑰創ニ對シテハ「カンフル軟膏ヲ貼布セシム、此ノ日右慢性化膿性中耳炎アルヲ發見シ爾來毎日其ノ處置チナス。其後日ヲ經ルニ從ツテ一般全身狀態良好トナリ食欲進ミ稍々榮養狀態恢復シ中耳炎又殆ド治癒ニ近ケリ。

五月十八日、義布スベツド」ヲ作り牽引ス。

六月二十七日、再ビ下垂膿瘍ヲ穿刺排膿シ、五十%白糖グリセリンヲ注入ス。

七月十日、即チ入院以來約八十餘日全身症狀及ヒ局所症狀等殆ド消失シ下垂膿瘍又認メ難シ、由テ義布スベツド」ヲ作り退院セシメタリ。其後數日ヲ經テ更ニ「セルロイドコロセツト」ヲ前ノ義布スベツド」ヲ原型トシテ作り之レヲ使用セシム、其後時々通院診療、日ヲ經ルニ縱ツテ良好、推骨ノ突出暨復セラレ、全身症狀等全ク元ノ如ク治癒ノ轉機ヲトレリ。

因ミニ本患者ハ大正五年徵兵検査ノ結果乙種補充兵ニ合格シ目下ハ在郷軍人トシテ時ニ激シテ運動チナスコトアルモ何等障害ナシト云フ。

第二例

初診 大正八年三月十三日。

熊○ナ○ 女、三十二歳、農。

遺傳的關係 父母健存、同胞三人皆健存ス、其他徵ス可キモノナシ。既往症 生來健全ナラザリシモ著患ナク經過シ二十歳ノ時結婚ス。

本病歴 昨年初夏ノ頃ヨリ原因不明ニ下肢漸次「トレモール」腰部鈍痛、歩行困難ヲ來シ又何時トナク右腸骨髁部ニ軟性ノ腫物ヲ生ジタリ又他人ノ注意ニヨリ腰部脊骨ノ突出セルヲ發見セリ、爾來醫治ヲ受クルモ經過

悪シク、食欲モ稍々減退シ身體又羸瘦セリ。

現在症 體格榮養稍々不良、全身ノ皮膚少シク蒼白ナリ。體溫三十八度、脈搏九十三至。胸部打診上肺心ニ異狀ヲ認メズ。聽診上右肺尖部少シク呼吸延長アルノミ、腹部諸臟器又異狀ナキモ稍々硬キ宿便アルヲ觸レ右腸骨高二於テ手拳大ノ波動アル腫隆アリ、該部ハ皮膚尋常ニ疼痛殆ドナシ、明方ニ寒性膿瘍タルヲ知ル、脊柱ヲ檢スルニ第一腰椎棘狀突起中等度ニ突出シ壓迫、輕打ニヨリ鈍痛アリ。膝蓋腱反射稍々亢進ス。

診斷 第一腰椎カリエス「下垂膿瘍」。

治療及經過 即日入院セシメ浮遊裝置ニヨリ仰臥セシメ牽引ス且ツ安靜ヲ命ズ、内服ハ前例同様藥物ノ處方ヲナス、翌十四日下垂膿瘍ノ穿刺ヲナシ五十%白糖クリモリン「ヲ注入ス。四日毎ニ、グイセリ浣腸ニヨリ排便セシム。

三月十四日、即チ入院翌日「チアノクプロール」四・〇ヲ注射ス。爾後十日毎ニ一・〇ツ、減量シツ、三回注射ス、第一回注射三日目ヨリ下熱シ三十六度ヨリ最高三十七度六分トナリ、脈搏七十乃至九十至トナリ、一般狀態良好ナリ。

同月二十六日、腹痛アリ檢便ノ結果蛔蟲卵ヲ發見シ「サントニーネ」ヲ投シ多數ノ蛔蟲ヲ排出シ腹痛去レリ、然レニ四月四日ヨリ更ニ體溫上昇シ七日ニ至リ最高三十八度六分、脈搏九十五至ニ達ス。然シ前方ヲ持續セシニ「チアノクプロール」第三回注射後十四日ニシテ下熱シ初メ、同月十六日ハ體溫三十六度脈搏九十至。十八日ハ體溫三十六度六分、脈搏七十一至トナリ一般症狀平常ノ如クナレリ。

四月十八日ニ「ギブスコルセツト」ヲ作り便用セシム。下垂膿瘍ハ消失シ其部僅カニ抵抗アルノミ。

四月十九日ニ患者自覺症狀ナキ爲メ退院セン「ト強要ス、依ツテ種々注

意ヲ與ヘテ退院セシム。其後聞ク所ニヨレバ全ク治癒シ業務ニ就キ居リシモ再發、肺患ヲ發シ過日死亡セリト云フ。

第三例

初診 大正九年三月十五日。

畑〇ウ、女、三十三歳、莫子商妻。

遺傳的關係 父ハ患者ノ幼時不明ノ病氣ニテ死シ母ハ建存ス、同胞ナシ、血族間ニ特記ス可キモノヲ認メズ。

既往症 生來健ナラズ度々醫藥ニ親シミタリ、二十八歳ニシテ結婚シ舉子ナシ。結婚以前マテ女髮結ナ業トシ常ニ腰ヲ前屈スル姿勢ニ業務ヲナシ時々腰痛ヲ感ズル事アリタリ、三年程以前ヨリ殊ニ健康勝レズ、感冒ニ罹リ易ク咳嗽喀痰アリ、更ニ醫藥ニ親シミタリ。

本病歴 昨年夏頃ヨリ何等認ム可キ原因ナク下肢ノ倦怠或ハ鈍痛アリ脚氣ナリト思ヒ俗間療法ヲナセシモ治セズ發熱サヘ加ハリ背部ニ疼痛ヲ感シ其後脊椎疼痛部ノ稍々右下方ニ無痛性ノ腫隆ヲ生ジ、漸次増大スルニ至ニ脊椎部ハ軀幹ノ前屈ニ依リ疼痛甚シクナリ且ツ歩行困難ヲ來スニ至レリ。發熱アルニ至レル頃ヨリ食欲減退シ身體稍々羸瘦セリ。

現在症 體格榮養稍々不良、全身ノ皮膚白色ナリ、特徴トシテハ顔面ニ著明ノ雀斑アリ。軀幹ハ著シク反張ノ狀ヲナシ、體溫三十六度七分脈搏七十三至、胸部打診上兩鎖骨上下高ニ於テ短調。他ハ異狀ナシ。聽診上右肺尖部ニ呼吸延長アリテ時々小ナル水泡音ヲ聽ク。左肺尖ニ呼吸延長アルノミ。其他心臟等異狀ナシ、腹部臟器異狀ナシ、脊椎ヲ檢スルニ第十胸椎棘狀突起稍々突出ス、此部ヲ壓迫又ハ輕打スルニ鈍痛ヲ訴フ該部ヨリ右下方第三腰椎推位ノ高サヨリ下ニ手拳大ノ波動アル腫隆アリ疼痛ナシ。膝蓋腱反射多少亢進ス。

診斷 第十胸椎カリエス、下垂膿瘍及ビ兩側肺炎カタール。

治療及經過 三月十八日入院セシメ、翌十九日局所麻酔ノ下ニ膿瘍穿刺チ行ヒ排膿シ沃度ホルムグリセリンヲ注入セリ。浮遊装置ニヨリ仰臥セシム、全身療法トシテ一般結核病ト同様榮養療法及食慾催進藥ヲ投ズ。

三月二十一日ヨリ毎日連續沃度カルシユウムノ靜脈注射チ行フ。然ルニ患者家事ノ都合上二十二日強テ退院シ爾來通院ス。入院中體溫三十六度七八分ヨリ最高三十七度七分ヲ示シ、脈搏六十一乃至九十二至。便通普通。六月二十七日ヨリ「ツベルクロストロミン」ノ注射チ初メ第一號液〇・〇五ヨリ皮下注射チ行ヒ一週毎ニ増量シ第二號液一・〇ニ達セシモ、著効アルチ認メ得ザリキ。患者退院時「コレセツト」使用ノ有効ヲ説キシモ用ヒズ。以後全身症狀及ビ局所症狀不良トナリ、九月以後漸次全身羸瘦シ發熱三十八度乃至三十度以上ニ達シ脈搏九十乃至百至以上トナリ、食慾減退シ、咳嗽喀痰多クナリ、右肺結核症進行ス。斯クテ椎骨棘狀突起ハ著明ニ突出スルニ至リ、下垂膿瘍穿刺孔ハ縫合スルモ途ニ癒合セズシテ瘦孔トナリ其ノ經過甚ダ不良トナレリ。九月下旬ヨリ通院セズ、診療セザリシモ本年二月下旬鬼籍ニ入レリト云フ。

第四例

初診 大正八年六月十六日。

福〇三〇男、七歳、古着商家族。

遺傳的關係 父ハ肺症アリ母ハ健存肺患アリ、同胞三人健存ス。

既往症 生來強壯ナラズ感冒ニ罹リ易ク咳嗽アルチ常トス、麻疹、種痘ヲ經過セリ。

本病歴 昨年二三月頃ヨリ原因不明ニ歩行時ニ際シ右下肢ノ疼痛アリ漸次増症シ跛行スルニ至リ發熱、咳嗽喀痰アリ。

原著 池田ニ結核性脊椎炎ノ統計ト其ノ療法

現在症 體格榮養共ニ不良ニシテ年齢ニ比シ身長體重等少シ。著シク羸瘦シ全身ノ皮膚蒼白ニシテ顔貌又過敏性ヲ帶ブ。體溫三十七度二分脈搏百至。頸部淋巴腺多數腫脹シ腋窩及鼠蹊淋巴腺又多數腫脹ス。胸部打診音肺門部ニ近ク稍々短調ナリ。聽診上兩側呼吸音稍々弱ク氣管支ニ沿フテ乾性雜音種々ヲ聽取ス。

腹部腸間膜腺腫脹セルモノアリ。脊柱ヲ檢スルニ第七胸椎棘狀突起稍々突出シ壓痛アリ。右股關節部ハ壓迫他動ニヨリテ疼痛アリ、歩行シ得ズ、同側大腿外ニ大人手拳大ノ波動著明ナル腫隆アリ緊脹シテ中央ヨリ周圍ニ向テ赤褐色ヲ呈ス壓痛ナシ。膝蓋腿反射稍々亢進ス。

診斷 診斷第七胸椎カリエス、右股關節炎、下垂膿瘍及氣管支周圍淋巴腺結核症。

治療及經過 即日入院ヲ命セシモ家事ノ都合上外來ス。六月十六日、寒性膿瘍穿刺排膿沃度ホルムグリセリン一ヲ注入シ穿刺孔ヲ縫合ス。内服藥ハ前例同様食慾催進強裝藥ヲ處方セリ。

「チアノクプロール」二・五c.c.ヲ注射ス爾後二週間目毎ニ一回ノ注射チナシ斯クテ十一月四日マテニ九回、其ノ一回量一・〇c.c.ニ達セリ。此ノ間膿瘍ノ處置七回。又ター方十月十六日ヨリ二週間毎ニ結核感作ワクチン一萬倍液〇・一c.c.ヨリ注射シ初メ千倍液〇・一ニ達セリ。其後更ニ沃度カルチエム一靜脈内注射チ併用反復シ、昨年三月頃ヨリハ殆ド寒性膿瘍消失シ疼痛減退シ丁木ニヨリ歩行シ得ルニ至レリ。患者爾來頻リニ戶外ニ遊戲シ比較的長途ノ歩行チモ敢テセリ。

本年一月頃ヨリ更ニ同側髖關節部ノ疼痛ヲ起シ瘻孔ヲ作り膿汁多量ニ分泌シ來リ再ビ歩行シ得ザルニ至レリ。然レモ本年四月頃其ノ母肺結核ノ爲メ死亡シ來院セザリシヲ以テ其後ノ經過ハ知ルチ得ズ。

第五例

初診 大正八年五月二十日。

西○伊○、男、二十八歳、農。

遺傳的關係 遺傳的關係父母健存、同胞一人健存ス、血族間遺傳性疾患ノ徴ス可キモノナシ。

既往症 生來強健ナラザリシモ著患ナシ、然シ二年以前右示指結核性骨膜炎ニ罹リ某病院ニ於テ根部ヨリ切斷サレタリ。

本病歴 昨春頃ヨリ認ム可キ原因ナク、腰部倦怠感アリ。疲勞シ易ク過勞後殊ニ著シク時ニ發熱サヘアルニ至リ鈍痛ヲ來シ且ツ下肢ニ時々疼痛發作アルコトアリ。八九月頃ヨリ前記症狀増悪シ臀部ニ無痛性腫物ヲ生ツ漸次増大セリ。此ノ頃ヨリ歩行困難甚シク腰部ニ激痛ヲ發作性ニ來シ、食慾減退シ高瘦セリ。盜汗、便秘又々時々アリ。

現在症 體格榮養稍々不良、顔貌又過敏性ヲ帶ビ、全身ノ皮膚蒼白チ呈ス。體溫三十七度三分、脈搏七十五至、呼吸器、消化器等ハ異狀ヲ認メズ。膝蓋腿反射著シク亢進ス。脊柱ヲ檢スルニ第二腰椎棘狀突起稍々突出ス壓痛著明ナリ。腸骨高ニ變化ナク右臀部ニ於テ臀筋部ニ一致シ波動著明ナル發赤疼痛ナキ著大ナル腫隆アリ。

診斷 第二腰椎カリエス、下垂膿瘍及咽喉頭加答兒。

治療及經過 即日入院セシメ、浮遊裝置ニヨリ仰臥セシム。重曹メソダ水ノ含嗽チナサシム。全身療法トシテ一般結核療法ヲ以ツテ處方セリ。同月二十二日下垂膿瘍穿刺排膿チ行ヒ沃度ホルムグリセリンヲ注入ス、同月二十四日ヨリ「チアノクプロール」四・〇〇注射チナシ二週目毎ニ減量シ第五回目ハ一・五ニ減量セリ然ルニ第二回注射後三日ヨリ發熱シ三十八度ヨリ最高三十八度六分チ示シ。第四回注射後ハ最高三十九度ニ至ル。此ノ

間膿瘍穿刺二回チ行ヒ第一回同様ノ處置チナス。

七月四日ヨリ更ニ結核感作ワクチンノ注射チ初メ一萬倍液〇・一ヨリ行ヒ五日毎ニ漸次増量シ八月二十九日ニハ一萬倍液〇・七ニ達セリ。體溫漸次下降シ三十七度三分ヨリ最高三十八度二分チ示セリ。六月二十四日臀部穿刺部自開シ多量ノ排膿アリテ以來縫合スルモ癒合セズ止ムナク自然排膿スルニ任セリ。而シテ一定時日チ經テ沃度ホルムグリセリンヲ注入セリ。

入院以來七十餘日チ經過シ此ノ間病勢一進一退時ニ腰部ニ激痛發作、歩行困難モ亦時々輕減シ或ハ増悪スルコトアリ。患者「コレセツト」使用チ度々勸ムルモ用ヒズ。俄ニ豫後ノ斷定チナシ得ズテ經過シ。種々療法ヲ試シタリシモ著効アリシト認メ難ク。只ダ腰部ノ疼痛、排膿稍々減少セルチ認メタルモ羸瘦益々甚シク患者過敏性チ増シ。八月三十一日退院セリ。爾來通院セズ。其後ノ經過チ知ル由ナカリシモ聞ク所ニヨルバ何ケ月カノ後遂ニ鬼籍ニ入レリト云フ。

以上五例ハ未ダ當院ニ於テ「レントゲン光線裝置」ナキ以前ノ實驗例ニシテ以下實驗例ハ「レ線光線裝置設置後」ノモノナリ。

第六例

初診 大正十年四月八日。

立○ハ○、女、二十七歳、農。

遺傳的關係 實父母健存、同胞一人健存其他血族間ニ特記ス可キモノナシ。

既往病 生來健康ニシテ著患ナカリシモ十九歳ノ時脚氣ニ罹リ約六ヶ月チ經テ治セリ。

二十二歳ノ春結婚ス夫ハ健存シ花柳病等ノ覺ヘナシ未ダ擧子ナシ。

本病歴

昨年五月頃ヨリ認ム可キ原因ナクシテ下腿左右共ニ發作性ニ疼痛アルニ至リ家人及自ラモ脚氣ト思ヒタルモ歩行困難又浮腫等ハナカリキ斯クテ山中温泉ニ約一ヶ月療養セシモ著効ナク歸宅シ温泉ノ湯ヲ取り寄セ自宅ニテ入湯療養セシニ約一ヶ月ノ後疼痛治シ自覺症狀ナキニ至リ爾來業務ニ服シタリ、然ルニ本年一月頃ヨリ左下腿ニ冷却感アリ十數日ニシテ治スルト同時ニ右下肢ニ同様ノ症狀來リ以後殆ド一定ノ日數ヲ以ツテ兩下肢ニ交代性ニ冷却感アリ且ツ歩行困難トナリ腰部ニ疼痛ヲ感シ前屈スルニ至リ終ニ脊推ノ突出サヘ來セリ、其ノ後約二ヶ月ニシテ右腸骨窩ニ鈍痛ノアル腫隆ヲ生ジ漸次増大セリ。

現在症

體格榮養稍々不長ニシテ全身ノ皮膚蒼白ヲ帶ブ歩行ハ右側跛行ヲナス。體溫三十六度五分、脈搏七十五至、顔貌ハ所謂「ヘルヴェース」ナリ、膝蓋腱反射亢進ス。

頸部淋巴腺一ニ稍々腫大セルモノアリ、胸部打診上右肺尖部ハ少シク短調ナル外心臟ノ境界等異狀ヲ認メズ、聽診上右鎖骨上窩ニ於テ肺尖ノ呼吸延長アリ、腹部諸臟器ニ異狀ヲ認メ得ズ、右腸骨窩ニ殆ド全部ニ皮膚色尋常ニシテ著明ノ波動ヲ感ズル腫隆アリ。試験的穿刺チナシタルニ多量ノ帶綠黃色ノ稍々濃厚ナル膿ヲ得タリ、脊柱ハ左右ノ側彎ナキモ第二腰椎棘狀突出シ之ノ部ニ於テ軀幹ハ稍々前屈セリ指壓ニヨリ少シク疼痛アリ輕打ニヨリ鈍痛ヲ感ズト云フ。

診斷

第二腰椎カリエス、右腸骨窩ト垂膿瘍及右輕症肺炎加答兒。

治療及經過

入院治療ヲ命ジタルモ患者或ル事情ノ爲メ入院セズ、病院附近ノ親戚宅ヨリ通院スル事トセリ之ニ於テ止ムナク自宅ニアリテハ

原 著 池田日結核性脊椎炎ノ統計ト其ノ療法

常ニ仰臥位ニアル事ヲ嚴命シ、内服ニハ一般結核病ニ對スル如ク食慾催進強壯藥ヲ投ジ、局所ハ「レントゲン」光線照射ヲ行ヘリ、「レ線照射」ニ用ヒシ球管ハ毎回「ブノア氏」硬度六乃至七ニシテ一紅斑量ヲ三密米ノ厚サヲ有スル「アルミニウム」板ヲ以ツテ濾過シ皮膚管壁間ハ約五種ノ距離トナセリ。

第一回照射、四月十三日。

第二回 四月十九日之日、患者ハ前回照射後二三日ニシテ甚シク總テノ自覺症狀輕減セル如キ感アリト訴フ。

第三回 四月二十五日認ム可キモノナシ。

第四回 四月三十日、四月二十七日頃ヨリ兩下肢ノ冷却感去リ著シク

溫クナリ且ツ腰部ノ疼痛モ殆ド消失セリ。

第五回 五月七日認ム可キ事ナシ。

第六回 五月十四日腰部ノ疼痛全ク去リ歩行ハ漸次安クナレリ唯ダ腸骨窩ノ腫隆ノ爲メ多少困難ナルノミト然シ下垂膿瘍ハ其ノ内容著シク減少シ殆ド二分ノ一トナレリ。

第七回 五月二十日、下垂膿瘍益々減少シ、膝蓋腱反射殆ド尋常トナレリ。

第八回 五月二十六日、著明ノ變化ヲ認メザルモ棘狀突起ノ突出減少シ患者ハ殆ド全治セルカノ如ク感シ唯ダ腸骨窩ノ下垂膿瘍ノミニ疾患トナレリ如ク自覺シツ、アリ。

本患者ハ此ノ稿ヲ終ルノ時尚ホ通院シツ、アリ。

第七例

初診 大正十年三月十五日。

皆〇い〇、女、三十二歳、農。

遺傳的關係 父七十六歳健存、母八八年前脊椎炎ニテ死ス、母系ニ

ハ結核ノ遺傳的關係アリト、同胞三人健存、其他特記ス可キモノナシ。

既往症

生來健康ニシテ嘗テ醫藥ヲ受ケタルガ如キ事ナシ、十六歳ノ時結婚ス、婚家ノ血族中遺傳的性質ノ疾病關係ナシ、學子七人中一人ハ生後六ヶ月、他ノ一人ハ四歳ニシテ死シ、他ハ健存ス。

昨年八月頃(妊娠六ヶ月)ニ少シク腰痛ヲ感シタルニヨリ醫藥ヲ受ケ約二十日間ニシテ治セリ、昨年十二月十日安スク女ヲ分娩シ、産褥モ普通且

ッ初生兒モ健康ニシテ發病前マテ哺乳シ日下健存ス。

本病歴

本年二月二日寒冷ニ長時間會スル機會アリテ其ノ日ヨリ突然腰部ニ甚シキ疼痛ヲ來シ、時々便秘サヘ加ハリ、醫治ヲ受ケタルモ治セズ、三月十日頃ヨリ益々疼痛甚シクナリ、同月十三四日頃ヨリ步行ハ勿論坐位スラナスヲ得サルニ至リ、咳嗽ニヨリテモ疼痛アリ、便秘益々甚シク、食慾大イニ減退ス。

現在症

初診當時ニ於テハ體格中等度、顔貌稍々苦悶ノ狀アルモ榮養ハ餘リ衰ヘズ、皮膚ハ少シク蒼白ノ感アリ、體位ハ仰臥ヨリ外疼痛ノ爲メナシ得ズ、下肢ノ自働的運動ハ尋常ナレドモ膝蓋腔反射殆ド消失セリ、體溫三十六度八分、脈搏八十二至。

胸部諸臟器ニ異狀ヲ認メズ、腹部ハ腹壁甚シク弛緩シ妊娠線著明ナリ、横行結腸ヨリS字狀部ニ至ル間稍々硬キ宿便アルヲ觸ル、外變化ヲ認メザリキ。

疼痛ヲオカシテ強イテ横臥位トナシ脊柱ヲ檢スルニ第三腰椎ノ棘狀突起ノ著シク突出セルヲ見ル、壓迫輕打ニヨリテ鈍痛ヲ訴フ、且ツ其ノ兩側ヲ壓スルニ疼痛アリト云フ、下垂膿瘍ヲ認メズ。

診斷

第三腰椎カリエス

治療及經過

即日入院セシメ浮遊裝置ヲナシテ仰臥位トナシ絶對安靜ヲ守ラシム。

内服藥ハ一般結核療法ト異ル事ナク投藥セリ、便秘スルガ故ニ試ミシニ緩ト劑ヲ投セシモ著シキ効ナク入院後三日目ニ少量ノ軟便アリタリ。

局所療法ハ前浮遊裝置ニ安靜ヲ守ル外「レ線照射」ヲ行ヒ前例同様毎回一

紅斑量ヲ用ヒ三密米厚ノ「アルミニウム」板ヲ以ツテ濾過セリ。

第一回照射 三月十九日、入院後之ノ日マテ體溫漸時上昇シ三十七度九分トナリシモ二十日頃ヨリ漸時下降セリ。

第二回 三月二十六日、二十八日ヨリ左右胸部各所ニ聽診上中度大ノ水泡音ヲ聽クニ至リ咳嗽喀痰アリ、急性氣管支炎ノ狀ヲ呈ス、體溫午前ハ三十六度三分午前三十七度三分トナリ、以後四月一日マテ朝夕約一度乃至一度五分ノ差ヲ示スニ至レリ、且ツ腰部ハ咳嗽ノ爲メ疼痛甚シト云フ、急性氣管支炎併發ノ初メ其ノ療法ヲ施シタル所四月二日頃ニ至リ胸部ノ狀態良好トナルト同時ニ體溫モ下降シ初メ、翌三日ニハ殆ド異狀ナキニ至レルヲ以ツテ第三回照射ヲ行ヘリ。

第三回 四月四日、入院後三日目ニ自然排便アリシノミニシテ「グリセリン」浣腸ヲ此ノ日マテニ五回行ヒテ排便セシメタルニ八日即チ第三回照射後四日目ニシテ自然排便アリ、又二日目ニハ看護者ノ助ケニヨリテ坐位ヲトルヲ得ルニ至リ、之ガ爲メニ疼痛モ感セザルニ至レリ、又十日ニモ自然排便アリ。

第四回 四月十一日、此ノ日モ自然排便アリテ以後退院スルマデ一日一回又ハ二回ノ自然排便ヲナスニ至レリ、十四日ハ助ケニヨリテ起立スルヲ得、翌日ヨリ步行シ得ルニ至ル。

第五回 四月十九日、之ノ日ハ「レ線室」マテ病室ヨリ步行シ來リ、然シ步行シ得ルニ至レル頃ヨリ胸部等ニ異狀ヲ認メ得ズシテ體溫又々夕朝約一度ノ差ヲ示スニ至レルヲ以テ安靜ヲ命ゼシニ其後四五日ニシテ體溫平常ニ復シ、患者モ元氣トナリタルヨリ試ミニ廊下ヲ散步セシメタルニ熱發ナ

キヲ得タリ。

第六回 四月二十六日歩行シ來ル。

廊下ヲ散步スルモ熱發セズ、第六回照射後ハ腰部ノ疼痛殆ドナク體溫又安定トナリ、大イニ元氣ヲ加ヘ食慾モマダ進ミ、患者ハ殆ド自覺症ナシトマテ云フニ至レリ、然シ棘狀突起ハ初診當時ヨリハ突出小トナリタルモ尙ホ充分ナルヲ得ズ、且ツ足下ノ物ヲ拾フニ推骨炎患者特有ノ狀ヲナス、サレド一般狀態良好ニシテ營養良好トナリ月經サヘアルニ至レリ、之ニ於テ

患者退院セン事ヲ欲シタルヨリ五月三日第七回照射ヲ行ヒテ種々注意ヲ與ヘ馬糞紙コレット」ヲ使用セシメテ退院ヲ許シタリ、其後五月十六日第八回ノ照射ヲ受ケニ來院セリ、其ノ間ノ詳細ナル經過ハ知ルヲ得ザルモ患者ハ殆ド全治セル如キ思ヒニテ本日ノ如キハ十五六丁アル停車場ヨリ歩行シ來レルモ何等困難ナル事ナシト云フ母ハ本病ニテ死シタルヲ以ツテ自身モ又其ノ後ヲ追フモノト覺悟セシニ斯ク全快セシハ實ニ再生ノ恩人ナリトマテニ感喜セリ。

以上實驗例ニ於テ吾人ノ試ミタル治療ハ「チアノクプール」Cyanopoolノ靜脈内注射ト「レントゲン光線ノ應用ナリ。而シテ其ノ結果「レントゲン光線ノ應用ハ實驗淺キヲ以テ未ダ俄カニ斷定シ得ザルモノアルモ「チアノクプール」ニ至リテハ少シク見ル所ノモノアリ。元ヨリ内科の效力ハ吾人ノ云々スルヲ要セズ外科患者ニ對シ殊ニ其ノ效力ヲ認メ得タルハ十歳前後ノ小兒ニシテ骨、關節ノ結核症ニ對シ驚ク可キ效力ヲ認メ得タリ。然レドモ壯年若クハ高年ノ同患者ニ於テハ效力確實ナラズ。サレバ吾人ハ小兒ノ骨、關節結核症ニ對シテハ好ンデ之レヲ使用シ治療例ノ夥多ヲ有シ當時報告セントシタリシモ情況其ノ機ヲ逸シタリ。

「レントゲン線ノ應用ハ元、一般結核療法ト同様ノ考ヘヲ以テ行ヒタルモノニシテ何レモ龜背部ニ向ツテ照射シ病竈ノ根治ヲ希望シタリ。

蓋シ骨及ビ關節ノ結核症ニ對スル「レントゲン光線療法ハ「ウーネルト硬度十度ヲ三耗ノ「アルミニウム板ニテ濾過シ二紅斑量ヲ放射シ三週間毎ニ放射、十字火法ニ從フヲ普通トス。吾人ノ使用セシ紅斑量ハ概算のニシテ多少ノ誤差アルベキモ間接測定法ニヨリ中等度ノ硬度ヲ三耗「アルミニウム板ニテ濾過シ僅カニ一紅斑ヲ使用シタルモ最初ニ於テ著效アルヲ發見シタリシヲ以テ常ニ此ノ範圍ニ於テ治療ヲ試ミ其ノ成績ヲ觀測セリ。

「レ線ノ病竈治癒轉機ハ緩徐ニ現ハレ遂ニ疼痛モ止ミ膿液モ減ジ且ツ化膿面ハ良好トナリ瘦管モ閉鎖シテ癩痕ヲ結ブモノナリ。思フニ寒性膿瘍スラ破壊セザレバ膿囊内ニテ吸收セラレ其ノ不良ナル肉芽ハ死滅シ之レニ代ユルニ結締

織ヲ以テ補充セラルルニ至ル。吾人此處ニ病竈ノ變化ヲ明記シ得ザルヲ遺憾トスル所ニシテ後日又報告セン事ヲ期ス。

五、結 論

涉獵セル文獻及ビ吾人ノ實驗等ヲ總括シテ之レヲ考フルニ左ノ諸項ニ到達ス。

一、結核性脊椎炎ハ泰西ニ於テモ本邦ニ於テモ男女ノ關係ハ其ノ差アルヲ認め得ザルモ年齢ニ關シテハ大イニ異ナルモノアリ。泰西諸家ノ報告ハ寧ロ幼年者ニ多ク本邦ニ於テハ壯年者ニ多シ、蓋シ老年者ニ至リテハ東西共ニ同一ニシテ其ノ數少ナシ。

二、本症患者ノ性ト年齢トノ關係ニ就テハ女子ノ男子ヨリモ優勢ナル年齢ハ本邦ニ於テハ泰西人ヨリモ稍々遅ク、泰西ノ女子十五歳乃至三十歳ニ於テ優勢ナルニ比シ本邦ニ於テハ二十歳乃至四十歳ニ於テ優勢ナリ。而シテ其ノ年齢ノ進ムニ從ツテ一般ニ優勢ナル男子ノ數ニ接近シツツアルヲ見ル。

三、吾人ノ治驗例ヨリ考フルニ本症ニ對スル治療ハ其ノ最初ヨリ浮遊仰臥裝置ニヨリテ矯正ヲ計ルト共ニ其ノ裝置ノママ運搬自由ナルモノヲ選ビ「レントゲン放射線療法ヲ行フヲ以テ適當ナル最良療法ト斷定ス。此ノ法ニヨリ小ナル下垂膿瘍ハ消失ス。已ムヲ得ザル貧困者ノ如キニハ自宅ニ仰臥ヲ嚴命シ單ニ馬糞紙コルセット」ノミヲ用ヒテ通院セシメ「レ線療法ヲ行フノミニテ其ノ矯正ハ不完全ナガラモ病機ヲ治癒セシメ得。

四、脊椎カリエス」ニ對スル「レ線療法ハ敢テ多量ノ紅斑量ヲ使用セズト雖モ僅カニ一紅斑量内外ヲ以テスルモ能ク其ノ效力ヲ認め得ルモノタルヲ知ル。

終リニ臨ミ七五三部長ノ始終御懇篤ナル御指導ヲ辱フシタルヲ深謝ス。

參 考 書 目

- (一) 越爾農暉斯 外科總論卷之一(明治十三年五月)。(二) 足立寬譯、彪氏外科各論第七、八卷(明治十九年一月)。(三) 田代義徳譯、智兒曼斯氏外科

- 各論卷之七。
- 4) 同氏譯、ゴット氏龜背、醫學大辭書(明治四十一年十月)。
- 5) 同氏、整形外科、醫學大辭書。
- 6) 三橋德寬、三輪外科叢書、第五編(明治四十三年八月)。
- 7) 木村孝藏、脊椎結核ノ治療法ニ就テ、十全會雜誌。(21, 63, 1-22, 21)。
- 8) 山極勝三郎、病理總論講義、新訂八版。
- 9) 松岡道次、「オルトペデー」トハ何ゾヤ、中外醫事新報。(664-671)。
- 10) 佐藤進、外科各論、卷之六(明治四十年一月)。
- 11) 下平用彩、新纂外科總論、第三卷(大正八年九月)。
- 12) 同氏、新纂外科各論、第二卷(大正八年四月)。
- 13) 佐藤三吉、日本外科全書、第一卷、外科史。
- 14) 鈴木寬之助、脊椎カリエスノ手術的療法、結核雜誌(1:3, 1)。
- 15) 上野信四郎、外科學ノ趨勢、醫治時報(大正二年八月以後大正三年)。
- 16) 飯島清、板紙「コレセット」及其ノ價值ニ就テ、附「コレセット」小史、日本外科學會雜誌(XXI, 1)。
- 17) 鳥居憲二、麻痺ヲ伴ヘル結核性脊椎炎ト其ノ療法、治療新報(386-387)。
- 18) 住田正雄、脊椎カリエスノ診斷及治療要旨、日本外科學會雜誌(XXI, 2)。
- 19) 古賀玄三郎、結核化學的療法ノ實驗的研究、醫海時報(1086-1086, 大正四年四月)。
- 20) 鈴木寬之助、余ガ脊椎カリエス「ニアルペー」氏法ヲ行ヒタル理由ノ説明、醫海時報(1404-1405, 大正十年五月)。
- 21) Tilmanns, Lehrbuch d. Spec. Chirurgie, 8 Aufl.(1904)。
- 22) Lexer, Lehrbuch d. allg. Chirurgie, 3 Aufl.(1908)。
- 23) 林暉、脊椎炎ノ矯正的療法、中外醫事新報(459, 55)。
- 24) 藤實清、丸毛登、岩澤造、藤井鐵也、藤浪剛一、れんぞげん學、南山堂(大正八年)。
- 25) 魚住完治、知氏外科總論、卷之二(明治三十年四月)。
- 26) 小山田謙、理化學的療法(大正五年一月)。
- 27) 白木正博、最近「レントゲン」放射線之原理及用法(大正九年二月)。